



© Yuki Nakase

Enjoy living with Street Art in the Lower East Side

日米比較は画蛇添足？

明治時代以降、日本は近代化政策として欧米諸国から技術と文化を学びました。福沢諭吉や津田梅子がアメリカから持ち帰ったものは英語だけではなく、欧米人の生き方や考え方を先進的だとする概念です。その影響は現在の日本の舞台芸術にも色濃くみられ、たとえば日本国内でのオペラやミュージカルの年間公演数やそれらに対応した劇場（ホール）の設備は、日本における欧米文化の多大なる影響が顕著に現れています。しかし、日本には長い歴史と特有の作風があり、輸入品を取って付けても日本独自の風土に馴染まない側面もあります。国際化時代に適応すべく広い視野から日本とアメリカの舞台制作を見比べたとしても、その格差を埋める必要はあるのでしょうか。

日本とアメリカの照明業務を比べると違いがたくさん見わかります。日本によくあってアメリカにあまりないものは、手締めハンガー、平凸レンズの器材、介錯棒、バインド線、多種多様なコネクター、そして現場で走るという行為などです。しかし、それらは雇用体系と照明チームの構造に比べると微々たる差でしょう。日本は会社に所属する、もしくは自身で会社を立ち上げた照明家が多いのに対し、アメリカはデザイナーもプログラマーもオペレーターも、ユニオンに所属・無所属に関わらず、フリーランスの

労働者がほとんどです。また、オペレーターの報酬が日給制の日本と時給制のアメリカでは、拘束時間に差が生じます。さらに、日本はオペレーターであることがデザイナーになるための下積みの役割を果たしますが、アメリカではデザイナーとオペレーターがお互いの知識をそれぞれ持ち合わせた別の職種であり対等です。

これらの日米の差から何を学ばよいか。私の結論は、日本にもアメリカにも長所と短所があり、各国がお互いの良い部分を見習えばいいのでしょうか。また、国際化とは必ずしも欧米化を指すのではなく、日本以外の国や宗教や民族の存在を認知し物事には必ず別解があることを受け入れることだと思います。日本とアメリカのどちらの照明が優れているかとか、どちらのやり方が正しいとか、明快な解を求めることは不必要であり、それらをあれこれ時間をかけて考えるのをやめ、目の前の仕事に伝えることが先決かもしれません。なぜなら、脚本、音楽、踊り、演出から求められている明かりを創ることが照明家の仕事だからです。「日本風」とか「アメリカ風」とか照明技法に都合の良い理屈をつけるより、作品に正面から向き合う素直さが大事でしょう。